

巻 頭 言

現代は「情報社会」とも「情報過剰社会」ともいわれます。このような社会においては、「情報」とどのように付き合うかがとても重要です。

オランダの心理学者であるダイクスターハウス氏たちが次のような実験をおこなっています。

お買い得な「当たり」1台を含む4台の中古車を用意し、被験者を、①よく考えて選ぶグループ、②選ぶための時間が少ない(制限時間が設定され、しかもパズルなどを解かなければ車を選べない)グループの2つに分ける。第1段階では、両方のグループに「燃費」や「エンジン」など、4つのカテゴリーについて各車の説明をしたうえで、当たりの車を選ばせます。第2段階では、説明のカテゴリーを12個に増やし、「トランクの大きさ」、「ドリンクホルダーの数」などについても伝え、当たりの車を選ばせます。

その結果、第1段階では、①のグループのほとんどが「当たり」を選び、②のグループは半数以上が「当たり」を選びました。第2段階では、②のグループの60%が「当たり」を選んだのに対し、①のグループで「当たり」を選んだ人は25%を切りました。

この実験からわかることは、多くの情報を持っていること、検討に長い時間をかけることが、必ずしも適切な判断につながるわけではないということ。4台のうち1台を当てる確率は「 $1 \div 4 = 25\%$ 」ですから、第2段階における①のグループの正解率は当てずっぽうに選んだ結果にすら及ばない状況です。

情報が多すぎたり、検討の時間が長すぎたりすると、小さなことがどんどん気になってくるものです。

この「進路のしおり」は、進路に関する膨大な情報の中から、皆さんに合うように本校の教職員が必要な情報を精選して編集しています。皆さんにとって最も頼れる「進路決定のガイドブック」として、大いに活用してください。

そして、進路について悩んだときは、一人で考え込むことなく、我々教職員に気軽に、そして早めに相談してください。

なお、この「しおり」は1ページ目から順を追って読む必要はありません。まずは、必要なところ、興味あるところから読んでください。併せて、余裕のある時にそれ以外のところに目を通すことも勧めます。何かを見たり考えたりする時に、自分の興味・関心等をもとに焦点化するばかりでなく全体を俯瞰的に見たり考えたりすること、また、自分とは異なる進路希望を持つ人がどのような取組をするのか等を知ることが、皆さんにとってとても良いことだと考えています。

将来について考えることは、悩ましいことではありますが、楽しいことでもあります。皆さんが、意欲的かつ主体的に自身の進路を切り拓いていくことを期待するとともに、我々教職員は皆さんを全力で支援します。

校 長 塩川 拓司